大炊寮納○略中

生大豆肆拾肆斛漆斗○略中　醬大豆二拾伍斛○略中　左馬寮秣大豆捌拾斛○略中

應德三年十二月廿九日　正六位上行權少屬縣宿禰○以下署名略

〔朝野群載三〕對馬國貢銀記

對馬島者、○略中全無田畝、只耕白田、或置諸租稅、至此島以大豆爲正稅、

〔敎令類纂初集八十八〕貞享四丁卯年十一月

定○略中

一關東方荏大豆納之儀、米壹升ニ貳升代、永壹貫文に五石代之積、高百石に大豆は貳升掛り、荏は壹斗掛り之積、向後高役ニ可相納、私領之上り地不同之所は、可爲右同斷、荏大豆共ニ大分御入用有之年者、可有增割、但各別之子細有之歟、荏大豆難納所は、前方御勘定所江可伺之、但伊豆甲斐陸奥出羽上方筋者、可爲有來通事、

〔拾遺和歌集七物名〕そやしまめ　高岳相如

いさりせしあまのをしへしいづくそやしまめぐるとてありといひしは

〔古今著聞集六管絃歌舞〕樂所預小監物源頼能は、上古に恥ざる數奇の者也、玉手信近に順て横笛を習けり、信近は南京にあり、頼能其道の遠きをいとはず、或は隔日にむかひ、或は二三日をへだてゆく、信近ある時にはをしへ、或時は敎ずして、遠路をむなしく歸るおりも有けり、○略中ある時は又豆を苅所にいたりて、又是をかり、苅をはりて後、鎌の柄をもて、苗にして敎けり、

〔七十一番歌合中〕卅五番　右　まめ賣

こひすればやせちのまめのさるなかせ涙の川は我ぞましける

〔時慶卿記〕慶長十年二月廿五日、晩ニ雷鳴、入夜ハ光澤タヾシ、初雷ナレバ節分大豆ヲ用、